

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月5日(金)

その2

◇ 秘密兵器④

グラウンドから「ガリガリガリガリ…」これまでにない、力強い引っ掻き音。砂塵を巻き上げて進む軽トラ。後方には、いつものように「根こそぎ君NEO」を纏う。

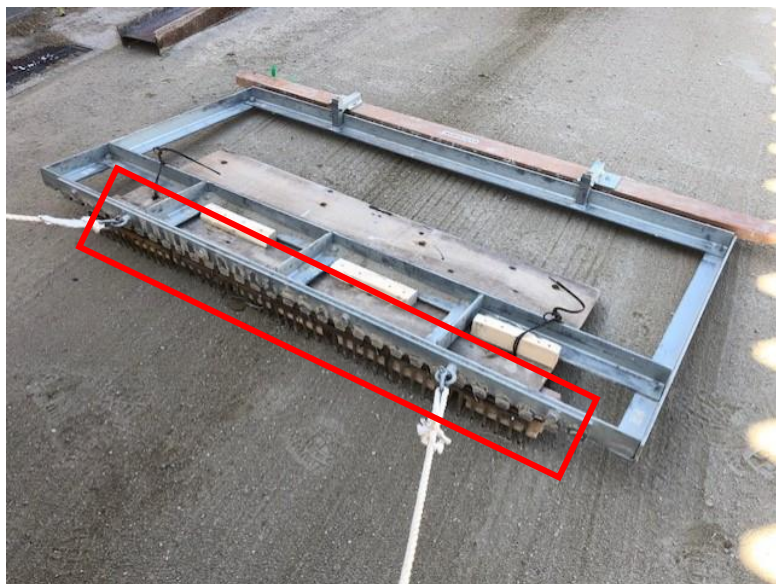
停止した「根こそぎ君NEO」をよく見ると、またまた進化しているではないか。

山田校務員の再改良によって、「根こそぎ君」は、バージョンⅢに生まれ変わった。



再命名は「根こそぎ君 根尾」。私は中日ファンではない根の尾っぽ、つまり『芝系雑草の根の先端まで刈り取る思い』を意味している。

改良が加わったのは、赤の部分。拡大したものが、右の写真である。



すり減った従来の刃を補うように、新たに鬼滅の刃が取り付けられた。

これは、廃棄になった鉄製熊手（レーキ）の刃の部分を再利用している。

廃棄せずにとっておくだけなら無用の長物だが、このように形を変えると、ある意味「宝」になる。4枚残しておいたことも大ヒットである。

【鬼滅の刃】を纏った「根こそぎ君 根尾」は効果満点。まさに秘密兵器となった。

さて、先日配付された「PTAおかげさき」2・3月合併号の2面に本校の記事が掲載された。

記事間のスナップ写真は、昨年8月末に行った「親子奉仕活動（グラウンドの草刈取り）」である。



雑草急成長期の8月の写真とはいえ、グラウンドの雑草は、コケと双壁の本校最大の難敵であると改めて思う。

◆8/22



◇3月上旬



とりあえず、両難敵の目途は付きそうだ。

そして、今、自分の目の前には「PTAおかげさき」の進んでいない原稿。

…新たに現れた難敵に、苦戦格闘中なのである。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月5日(金)

その3

◇ 仲良きことは 美しきかな

2日、6年生主催の「なかよしレク」が行われた。

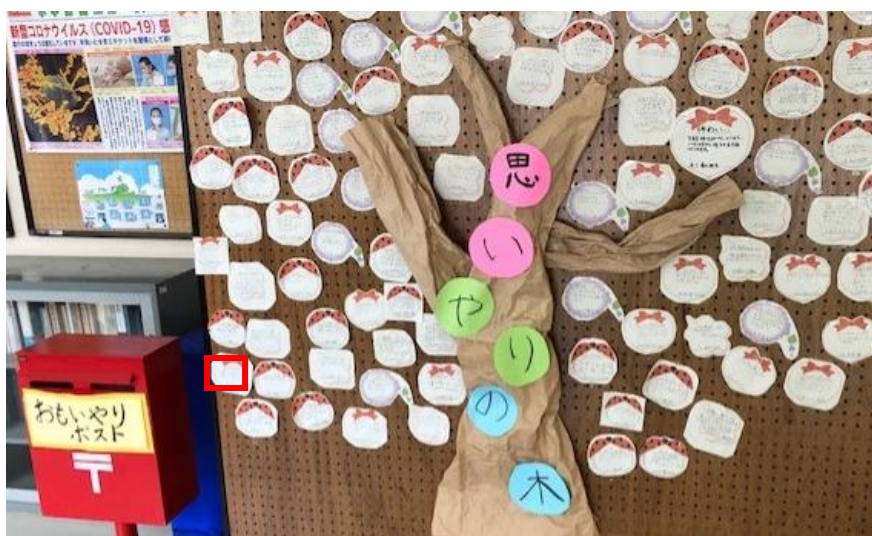
全校児童を6つのグループに分け、出来得る限り混合学年となるように配慮するなど、皆が笑顔になる温かい企画であった。緊急事態宣言が明けたとはいえ、この時期に、全校児童が一堂に会することができるのは、本校ならではの光景である。

最も注意した点は、「密にならないこと」であったらしい。細かな配慮に最高学年としての自覚と責任が垣間見えた。

大成功の「なかよしレク」。マスク越しの下級生の笑顔が全てを物語っている。



もうひとつ紹介したい代表委員の企画がある。昇降口を抜けた最も目につきやすい位置に掲示された【思いやりの木】だ。本校の「おもいやりの木」は、感謝の思いを綴ったメッセージカードで花を咲かせ、梅や桜より先に満開だ。



人権週間との日程的なずれもあり、てっきり毎年行われているものかと思ったら、そうではないらしい。後期代表委員の「とっておき企画」であった。

いずれのメッセージもあたたかく、ほほえましく、味わいがあってよいが、最も

よい点は学年をまたがったメッセージが多いことにある。学年を越えた深く、温かなつながりが存在する証である。

そして、1枚のまさかのカードに驚いた。

「児童の思いやり」に心が救われた。「ありがとう」



常磐東小学校 校長だより

常なる磐

つねなる いわ

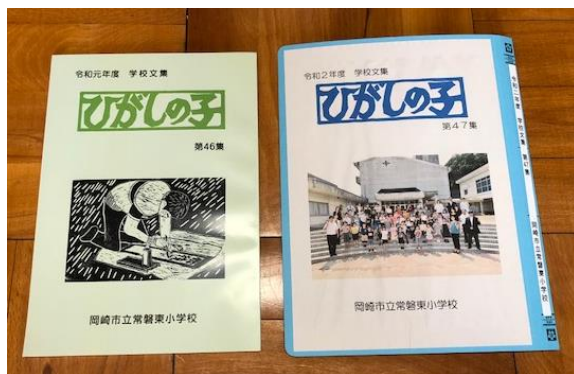
令和3年3月12日(金)

◇ 学校文集【ひがしの子】第47集

様々な理由で廃刊となる学校もある中、本校は、これまでと同様に「学校文集」を発刊する。

初刊の刊行が昭和48年。校舎移転前から続く文集は、本巻で第47集と歴史が深い。

ご家庭に配付できるのはもう少し先になるが、カラーページを増やすなどの新たな工夫も加えた【常磐東小学校 学校文集「ひがしの子」第47集】をお楽しみいただきたい。



▲左：R元年度46集 右：R2年度47集

写真にあるように、今年度は装いを新たに。「冊子」から「ファイル」への変更である。これにより、単価をかなり抑えることができた。実のところ、今年度のPTA会計は、やりくりを間違えれば火の車となっていたところであった。

寄贈品バザーと運動会食品バザーの中止や、緊急事態宣言の発出を受けた資源回収の中止に伴う収入減は、緊縮財政で何とかやりくりしていたPTA会計もマイナスに切れ込みそうな状況が見えていた。そこで何か手を打てないかと、最後に目を付けたのが「学校文集」である。

「廃刊を視野に入れて…」というよりはむしろ、「廃刊の方向で…」と臨んだ職員会議で、担任の先生から「残したい」という声が挙がった。なんと全員である。

前向きな声の根底にあるのは、毎日接している【子どもの存在】と【子ども自身の思い出づくり(残し)】である。「子どものために…」なのである。

「さすが、担任である」と改めて思うと同時に、温めていた腹案を出す。文集を印刷業者に依頼するのではなく、職員手作りで行う腹案だ。当然のことながら、そこに費やす時間と労力は例年の比ではなくなる。それが見えている。見えていても、「やる」方向で決着する。

おかげで1冊千円以上かかっていた学校文集が、数百円で刊行できる運びとなった。教頭先生のおかげもあり、PTA会計のマイナス計上回避も見えてきた。それでも、発刊はもう少し待っていただきたい。製本作業は、なかなか大変なのである。

文集配付は児童の家庭のみとなる。紙面を借り、「はじめに（校長）」と「おわりに（教頭）」執筆分のみ、以下に掲載する。

学校文集「ひがしの子」 第四七集の発刊にあたって

校長 近藤 善紀

学校文集「ひがしの子」は、本巻で四七集の発刊となる。つまり、年月を重ねること四十七年。初刊の発刊は、昭和四十八年である。本文集は、昭和から平成をまたぎ、現在の令和と三つの元号を歩んできた深い歴史がある。編集に係る労力や金銭的な負担から、学校文集の廃止の風潮が進む中、本年度も継続して発刊するに至った最大要因は、本校教員、特に担任の熱意に他ならない。

本文集のよさの一つに、作文の「手書き」がある。ひらがなから習い始めた一年生であるが、作文には漢字が混じる。これだけでも、学びの成果がうかがい取れるが、綴られた元気で伸びやかな文字が、一年の成長を表している。鉛筆をしっかりと支えられずに文字が震えていた痕跡すらない。完成した作文を通し、こうした成長を最も感じ取っているのは担任であろう。しかし、数年後、十数年後、さらには年老いてから文集を紐解いたとき、自分が綴った文字を通して、しみじみと自らの成長を感じ取ることができる。

さて、ここで文集ができあがるまでの流れを説明しておきたい。本校に赴任するまで中学校しか勤務経験のない自分にとって、本校の作文指導の丁寧さには、感動を覚えるほどの衝撃を受けた。思いのままに綴るのも味わいが生まれてよいが、本校の文集作文には、正しく適切な学びの手順、そしてさりげない教師の支援があることをお伝えしたい。

はじめに、自分の生活を振り返らせ、思いを巡らせながら作文の軸に据える内容を決めさせる。続いて学習プリントを使いながら作文を構成させる。つまりレイアウトだ。何本かの柱を作って主構成を行い、作文の見通しをもたせ、この柱に肉付けしていくのだ。まさに作家活動である。書きたいことが決まっている子ばかりではない。文章を書くことを苦手としている子は、自分を振り返る第一段階からつまづく。ここで教師が少しずつヒントを出す。少しずつというのが大事で、最後は自分で決めたと実感できるように仕向ける。こうした場面に直面すると、寄り添う指導の重要性を再確認する。

続いて作文の下書き、清書へと入っていくわけだが、自分が行ってきた誤字や脱字の点検が主な指導に対し、本校は子どもの思いを引き出す支援が加わる。複数回の下書きを経ると、次は教師が全ての作文をパソコンで打ち直す。これは構成の再確認の意図もあるが、メインは子どもが行う清書のための手本である。これがあるから、子供は安心して清書ができるし、自分で確認もできるのだ。一生残る文集作文とはいえ、教師のさりげない丁寧な指導に驚いた。

本巻より、文集に新たな手法を加えた。文集のファイリングである。常磐東小学校での学びを終えた時、六年、六巻の文集を一冊にまとめるもよし、自分の六年間の作文をまとめるもよし。六冊の冊子を上手の一つにまとめることで、自分の思い出をぎゅっと詰め込むことができるようにした。段階的な移行であるが、ファイリングをうまく利用し、思い出を残してもらいたい。

あとがき

教頭 鈴木紀予子

この一年、学校行事は変更を余儀なくされ、今まで経験したことのない活動を重ねました。それらは、負担に感じる面もありましたが、私たちを大きく成長させる力ともなりました。学校文集「ひがしの子」四十七集には、私たちを取り巻く環境が大きく変化したこの一年間の思いが感性豊かに綴られています。

令和二年十一月十五日、たくさんの地域の皆様のご協力のもと、「常磐東小学校創立百二十年記念式典」を開催することができました。この文集は、このときにみなさんが宣言した「常磐東っ子百二十年宣言」にある、ふるさと「常磐東」を「誇りに思う心」であり、頑張り続けるみなさんの「心の財産」であり、「未来を照らす光」でもあります。

思いを書き切り、自分を振り返り、さらに心を磨いていく。こうして生まれた文集を折に触れ読み返し、豊かな自分の将来への道標としてください。

常なる磐

つねなる いわ

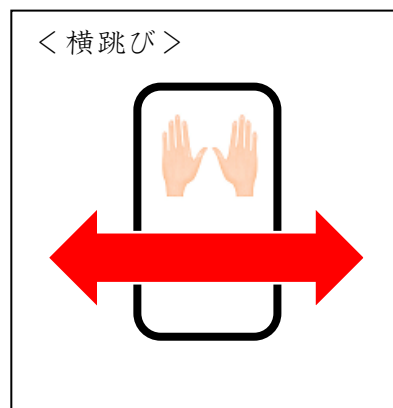
令和3年3月12日(金)
その2

◇ 体育の授業にて

2月末から3月にかけて、2年生と4年生の体育は「跳び箱」が行われていた。授業の様子（流れ）を見てみると、発達段階と体力に応じた、よく考えられた指導が行われていることに気付く。

2年生がはじめに行っていたのは、跳び箱の「横跳び」である。3段ほどの高さのない跳び箱を使い、跳び箱に手を着いて横に跳び越える技である。

跳び箱に手を着き、肘を伸ばして体を支えることの体感をねらいとしている技であるが、跳び箱の入門技としては最適である。横跳びなら、跳び越える幅（距離）も狭く、何とんでも手を着く位置が通常の縦飛びと同じである点が良い。いくつもの要素を備えている。



跳び箱のこつは、体を上方に浮かせる（跳ぶ）ことにある。これに助走が加わるから、横方向の力と上方向の力の合算により、斜め上方の力（ベクトル）が働く。浮いた体を腕で支えれば、生み出した力により体は跳び箱を越えられるわけだ。ポイントは腰の位置。腰の位置が高い位置にあれば、跳び越えることは容易である。しかし、この感覚が難しい。跳び越える動作から前方に行くイメージが働き、踏み切りが前方に行きがちになる。すると、腰の位置の高さ不足を生み、越えられないのだ。さらに、前方の障害物（跳び箱）が恐怖心を生むから厄介である。先に手を着こうとするから腰が曲がり、腰の位置はさらに低くなってしまふ。悪循環である。

そこで生きてくるのが「横跳び」である。止まった位置（安心した状態）から手を着いて、上に飛ぶことを意識させる。この上方への意識が大切なのである。

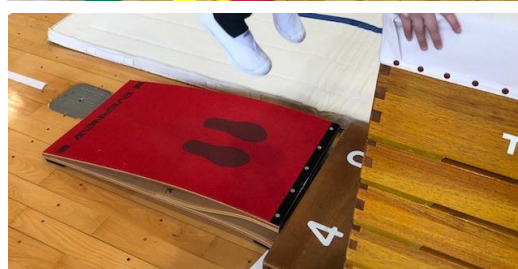
しばらくすると開脚跳びに移行である。すぐに跳び越えられる子もいれば、なかなか苦戦している子もいる。苦戦している子は、やはり腰の位置が低い。すると、担任はその子らに「横跳び」を繰り返し練習させはじめる。一呼吸を置いて、開脚跳び。見事に成功者が増える。まだ跳べない子も、明らかに腰の位置が変わった。もう一息だ。そのことも実感できているのであろう、まだ跳べないが、表情は明るい。見通しがもてたことが大きい。見通しをもたせられたことが大きい。

体育倉庫から化石のようなすごいものを見つけた。「踏み切り版④」である。

現在の主流は「ロイター板⑤」で、板バネ構造が跳躍を助けるのである。このロイター板に移行したおかげで、体を上方に浮かせる感覚を子供につかませる指導効率が向上した。

昔は、ばね構造のない「踏み切り板」。改めて考えれば、跳び箱を苦手としている子に、その苦手を加速させるような代物にも思える。

道具や器具は本当に大事である。



4年生の「跳び箱」は、技が増える。膝を曲げた状態で支えた手の間にできた空間に体を抜く「閉脚跳び」が行われていた。

この「閉脚跳び」は膝を曲げることがこつのように思われるが、実のところ開脚跳びと同様に腰の位置の高さにある。ほかは、自分の恐怖心との戦いである。腰の位置は十分であるのに、恐怖心が膝を伸ばさせ、台上に足を着けてしまうのだ。だから、4年生は、まず体を抜く前段階として台上に乗る練習をさせていた。「台上に乗る＝上方への跳躍」であり、感覚の体感をねらいとしているのだろう。

技の実施となると、この前段階の指導が効いてよいバランスで跳ぶことができる子も確認できる。苦勞している子は足の処理だ。だから、台上に乗ってもよいから、前の方に足を着くように助言が入る。するとどうだ。この一言でまた跳躍完了者が増えていく。

「跳び箱」は運動種目として面白い。それまでできなかった技が、何かをきっかけにして技が完了できると、「今までの苦勞は何だったのか…」と思うぐらいに、次々と成功した技をこなせるようになる。自転車や竹馬と同じ感覚である。

最大の要因は「できた」という自信である。これが、最大の難敵「恐怖心」を取り去る。勇気をもった思い切った跳躍を導くのである。

できなかった技ができた瞬間の子供は、「これでもか」というぐらいの笑顔を見せる。そして、子供に負けないぐらいに大喜びする担任の姿がある。こうした寄り添った支援が、どんどんどんどん…子供の向上心を高めていくのだ。

「台上前転も、8段跳びも、任せて！」
そんな子供たちの声が聞こえてくるようだ。



常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月12日(金)
その3

◇ 昼放課にて

掃除を終えると、グラウンドに飛び出していく子供たち。昼放課の子供たちの元気な姿は、いつ見ても気持ちが良い。昼放課の様子を紹介する。



ブランコは、年中人気の遊具である。本校のブランコは、停止時の足位置が水溜りにならない工夫がある。少雨の雨上がりなら、全く問題はないのだ。

珍しく鉄棒に興じている。触っても冷たくない。暖かくなってきた証である。



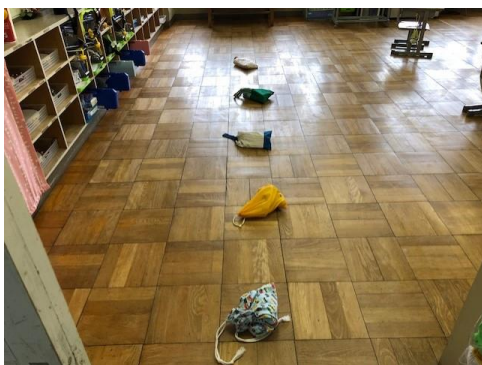
トラック内はサッカー。体育の授業で扱っていることもあり、最近の大流行（おおはやり）である。

その外側は「おにごっこ」。種類も様々で、こちらも年中人気があり、よく見られる光景である。

教室内では、読書に集中する子もちらほらと。

絨毯張りの1階多目的スペースでは、積み木に興じる2年生。せっかく積み上げた塔が崩れ去り、がっかりして片付ける4人。さみしさの中で、最後まで協力して片づけをする姿が微笑ましい。

これら遊び道具の消毒も欠かせないのだ。



1年生の教室を覗くと、誰もいない教室の床に体育館シューズが並べられていた。

なるほど、背面黒板の時間割を見て納得。長放課後の5時間目の体育「跳び箱」の準備だった。

体育館シューズも「ソーシャル・ディスタンス」。

※ちなみに、これは担任の指示ではない。子供たち自身が考えて行ったこと。驚きである。1年間の指導の成果が表れている。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月15日(月)

◇ 卒業証書授与式に向けて① 「6年生を送る会」



遠目から見れば変化がないように見える桜階段の「ソメイヨシノ」であるが、梢のつぼみは、日に日に膨らみを増し始めた。

19日(金)に迫った【卒業証書授与式】の開花は難しそうだが、今学校は、自然も足並みをそろえるなど、卒業色一色である。



5年生が中心となって開催した10日(水)の【6年生を送る会】は、本校ならではの温かさのあるよい会であった。

学校の大黒柱である6年生の姿がなくなることは、確かに寂しさはある。その一方で、この卒業期に5年生は急速に逞しさを備える。進級に向けた逞しさであり、最上級生なるための準備である。



特別席の6年生の右前方に掲げられたのは、全身まで描かれた等身大の似顔絵。水彩画で描かれた似顔絵は、ご覧のように「そっくり」である。

様々なデジタル機器がそろう中で、手作りのアナログであるのが、味わいが出て、またいい。何より「温かさ」が加わる。そして「上手い」。制作を一手に引き受けた5年生の絵画力・描写力には、本当に驚かされる。

バランスがよく、指先までしっかり描けているのには理由がある。似た体格の5年生がポーズを取り、体の線をなぞった下絵をもとに描くから、まるで動き出しそうなリアルさがある。





ちょうど5年生が顔を書いている場面を見たことがある。拡大写真を横に置いて、穴が開くほど写真を見ながら描写していた。

よく見て丁寧に描くから、耳の細部や髪の毛の流れまで描き表せている。頬も薄く紅が入り、生気に満ちている。似顔絵にT君のよさが出ているのは、描き手（5年生）の感謝の表れなのである。

誰かのために何かを行うのは、楽しい。喜んでもらえる姿を想像すると、やる気が出る。それが、より身近な相手であればあるほど、意気は高まる。

お返しを期待しない、ただ、やりたいからやる「身近な人への無償の努力」は、最終的に自分の心の力となって自分のもとに帰ってくる。

5年生が6年生のために心を込めて行ったことは、5年生に見えない力となって戻ってゆく（帰ってくる）のである。

6年生は、去年、卒業生におけた感謝の思いを託そうと、同じように力を尽くしている。だから6年生は5年生の思いも分かる。

言葉を交わさなくても分かり合える。ここが「いい」、ここが「大事」。

この似顔絵。卒業式後には、本人に贈られると聞いた。卒業証書は6年間頑張り続けた貴重な証であるが、似顔絵は、他校にはない、何よりの贈り物である。



会の最後は、6年生の感謝の言葉。込み上げる思いで言葉も詰まるが、ちゃんと思いを伝えきることができるのは、流石6年生。

来月には、私服が制服に代わる。

外見は変わっても、中身は変わらない。しっかりやれると断言したい。



そして横断幕。これも5年生を中心に全校児童の作成。タイムリー性もある。

「笑顔」でありがとうを伝えたら、「嬉し涙」が返ってきた「よき会」だった。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月16日(火)

◇ 卒業証書授与式に向けて② お願い



「6年生を送る会」、1年生からの贈り物を受け取る6年生たち。

嬉しそうである。
贈り物を見つめる視線も優しい。

手作りだから、なおよい。

手作りが温かさを生むのだ。

プログラムの最後は、6年間を振り返るスライド。

1年生担任の先生からの手紙、2年生の担任の先生からの映像も加わる。6年生が常磐東小学校での6年間の足跡を振り返り、成長を実感できる見事なスライドだ。さらに5年生のアナウンスが花を添えた。



担任がほぼ付き切りの小学校は、児童と担任とのかかわりが深く、情も移る。新任で4年生を担当したA教諭も、映像を通し、その頃のことが一気に思い出されたのだろう、感情の高まりが表情の変化からくみ取れた。

6年生ばかりか、下級生の目にも別れを惜しむ涙が浮かぶ。学年を越えた仲のよさに加え、目に見えない子供同士のつながりの深さが見えた気がした。

「6年生を送る会」、とてもよい会であった。そして、子供の成長に欠かすことのできない必要な会であることを実感した。開催自体を検討した時期もあったが、終えてみれば、「やってよかった」の一言に尽きる。

そして、この会を機に、一気に学校が卒業式に向けて動き出した。

さて、卒業証書授与式の実施については、愛知県独自の「厳重警戒措置」を受け、新型コロナウイルス感染対策を講じて安全面を確保しつつ、以下のとおりの短縮実施を予定している。保護者の皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

- ・保護者については、各家庭2名までとする。
- ・保護者控室として家庭科室（1階）を準備。開式直前に体育館にご案内し、式後は控室で待機していただく。学級の時間終了後、教室にご案内する。
- ・在校生児童については、密にならない工夫をして全学年が参加する。
- ・在校生、来賓、保護者、教職員はマスク着用必須の参席とするが、卒業生はソーシャルディスタンスを保つことを前提に、マスクは「なし」とする。
※写真・動画撮影を考慮
- ・来賓はPTA会長のみとし、祝辞については紙面で対応（保護者配付封筒内）とする。
- ・会場となる体育館の窓・扉は、開放状態を保って実施する。
- ・記念品授与については従来どおり実施する。
- ・国歌「君が代」斉唱は割愛する。
- ・卒業生の「卒業の歌」は従来どおり。在校生の「送別の歌」は割愛し、校歌は1番のみとする。
- ・在校生の「送別のことば」、卒業生の「門出のことば」は、簡略化して実施する。
- ・見送りの会での鼓笛は、屋外実施を考慮し、従来どおり実施する。

◆受付	9：30～9：40	※受付後、控室（家庭科室へ）
◇体育館へのご案内	9：55ごろ	
◆卒業生入場	9：58	
◇開式	10：00	
◆式終了	10：35ごろ	※保護者は控室（家庭科室）へ移動
◇保護者教室に移動	11：10ごろ	
◆門出の会	11：25ごろ～	※在校生一斉下校11：50

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月17日(水)

◇ 卒業証書授与式に向けて③ 120年宣言と6年生

3文から成る「常磐東っ子120年宣言」。実は、メインは最初の宣言文である。

「わたしたちは 常磐東の 【光】 となります」

後ろから遡（さかのぼ）ると、宣言がつながるようになっている。

つまり、

「常磐東の将来を大切に」しながら、「常磐東のために頑張り続ける」ことで【常磐東の光】となる。という決意の宣言文なのである。

卒業を機に、地域への愛着について改めて考え、自分の住む街を大切にすることを固く、確かなものとしたいものである。

さて、メインの最初の宣言文。この宣言文のキーワードは【光】だ。

そして6年生の名前が、【光】とつながりがあることに気付いた。

名前と【光】との「つながり」。

卒業式の式辞の中で述べようと計画したが、時間の都合上、やむなく削除。

それでも後悔しないために、書面を借りて伝えておくことにした。

☆大江 智暁（おおえ ともあき）

「江」は大河を表す。さらに「大」が加わることで、河（川）の大きさをスケールアップしたのが「大江」である。

大きな河は激しく流れない。ゆったり流れる。ゆったり流れる水面に陽がさすと、水面は一気に光を反射し、【光】を生む。

「暁」は「日＝陽」と「堯」から成る。「堯」は「高いこと」を表すので、「暁」は太陽が高く昇り、燦燦と【光】注ぐことを意味する。

☆細川 煌高（ほそかわ こうき）

「細川家」といえば、江戸時代の熊本藩「肥後細川家」をイメージするが、本姓は「源」、つまり源氏である。岡崎市の細川町から発祥したことで「細川」となる。この細川家の旗印が「細川九曜」。太陽の周りに8つの星が並び、太陽が【光】を放っているような家紋なのだ。

さらに「煌」は、「きらめき」「かがやき」と読むほか、「輝く火の【光】」という意味があり、煌貴とは「気品ある、絶えない【光】を放つさま」なのである。

☆中根 槇助（なかね しんすけ）

愛知県の中根姓は11,000人。東京の中根姓の4倍と、愛知にゆかりのある姓で、しかも岡崎市が最多だ。「中」は文字どおり真ん中の意味、「根」は山の尾根が立ち上がる麓の部分を指す。つまり、山に入りやすく平地にも出やすいので、「中根」は、人が住みやすい場所（集落）を指す。それが新居であり、小丸であり、安戸であり、大柳であり、蔵次であり、米河内。つまり「中根」は、常磐東そのものなのである。

「槇」は、花が咲く「梢（こずえ）」を表す。花言葉は「慈愛」で、樹木が花を咲かせ、【光】を放つことを意味している。「槇助」はそれを助けるのである。

☆和出 翔吾（わで しょうご）

「和出」は、全国で500名しかいない姓である。しかも、500名のうち200名が愛知に集まり、愛知の中で最多の70名を岡崎が占める岡崎の姓である。

「和」とは、「和製」「和式」にみられるように日本のことを表す。つまり、「和出」は、日本が出る（いずる）と書く。つまり、日の丸（太陽）があがる様子を表している。沈む夕日ではなく、昇る「朝日」だ。太陽の【光】が一番美しく、人に元気を与えるのが朝日であり、その朝日が「和出」なのである。

名前の「翔」は、羽が生えた羊。地を駆け巡る羊ではなく、高く舞う羊である。その背景には【光】がさすイメージが浮かぶ。光の中を駆け巡る。そんな自分＝「吾」が「翔吾」である。

続きは次号

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月18日(木)

◇ 卒業証書授与式に向けて④ 120年宣言と6年生

常磐東っ子120年宣言文。この宣言文のキーワードは【光】。

そして【光】6年生の名前は、【光】とつながりがある。<③の続き>

☆青山 稚己（あおやま ちみ） ☆峰澤 蒼心（みねざわ そうしん）

「稚」は「のぎへん」に「ふるとり」とで成る。「ふるとり」に「木」を加えると「集」となるように、「ふるとり」は集まるさまを表す。そして「のぎへん」は「稲」。よって「稚」は、「田に稲が実るさま」とも取れる。頭を垂れた稲穂が風にそよぐ様子は、まさに【光】の束である。稚己とは、自身の【光】なのだ。

炎は赤と「青」がある。赤色の炎は酸素不足で温度が低く、炎としては幼い。温度が高くなればなるほど、炎は「青」色となっていく。つまり、「青」は高められた色、消えない炎＝【光】なのである。さらに、体の中でめらめらと燃える「心の炎」を表すときは、「青」とともに「蒼（あお）」を用いる。「蒼心」とは、まさに、やる気を表す心の炎＝【光】を表している。

「蒼」が用いられる熟語として「蒼天（そうてん）」がある。蒼天とは、「雲がまったくない真っ青な空」を表し、「蒼」には「くもりがない」「澄みきった」様子を表す。くもりがなく、澄み切った空だからこそ、人は太陽の【光】のありがたさを感じるのである。

☆長谷川芽依（はせがわ めい）

「芽」は樹木の梢に宿る新たな生命。冬の間は身を固くして寒さをしのぎ、じっと春の訪れを待つ。温かくなると、樹木がため込んだエネルギーを全て新「芽」に注ぎ込む。これは、桜が葉をつけてから花を咲かすのではなく、花を咲かせてから葉を成長させることから分かる。「芽」は十分にエネルギーをため込み、「芽」を膨らませ、一気に花を開かせる。ため込んだエネルギーを開花に結びつけるのは、宣言文にある「努力し続けて、【光】となる」のと同じである。

「依」は「にんべん」に「衣」。よって「芽依」は、【光】である「芽」を人の手によって衣を纏わせたとも解釈できる。昔話でイメージすれば「かぐや姫」か。竹をも【光】らせ、人を幸せにするのが「芽依」である。

6年生と常磐東っ子120年宣言文のつながりは、以上。さあ、【光】となれ。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月24日(水)

◇ 常磐東小学校 校歌に想う

令和2年度(2020-2021)。

振り返れば、目に見えない大きな敵と戦う複雑な社会情勢の中、数多くの制約に屈することなく対応し、成果を上げた子供たち。全校児童が本当によく頑張った1年であった。

制約は、時に人を成長させる。

注意を払い、一つ一つを丁寧に対応していく学校生活。

指示をしっかり聞く習慣も身につけた。

指示の意図を考えることの大切さに気付いた。

指示を行動につなげ、やり続ける粘り強さも身につけた。

小さな歩みではあるが、確実に前に進むことのできた1年であったともいえる。

校歌に照らし合わせれば、2番の歌詞があてはまる。

学校が求め、全うすべき子供の姿を分かりやすく、しかも簡潔に、それでいて身を引き締めさせる歌詞。卒業証書授与式の式辞にも織り込んだ一節。

腕組む影さえ輝いて
常磐東の学び舎に
正しく鍛える身と心

「正しく身体と心を鍛えれば、平面で色のない影でさえ輝く」という喩えだ。

「影」を形容する「腕組む」がよい。

正しく鍛えた身体と心が備わっているから、腕を組む姿が堂々としているように連想させている。しかも、「鍛える」が後に続くことで硬くなりがちな歌詞を、「腕組む」が加わることで軽快に仕上げている。

さらに、「鍛える」を形容する「正しく」がよい。「正しく」＝「正統派」。

この言葉がすべてを治め、整えているといってもよい。

令和2年度。まさに子供が「正しく鍛える」を全うで生きた1年であった。

そしてこの経験は、今後必ず生きるのである。 児童、担任に拍手!!!

児童昇降口右手に【校歌碑】がある。

興味深いのは、「校歌」ではなく、【常磐東小学校の歌】と題目があること。

理由は定かではないが、間違いなく「校歌」である。



常なる磐

つねなる いわ

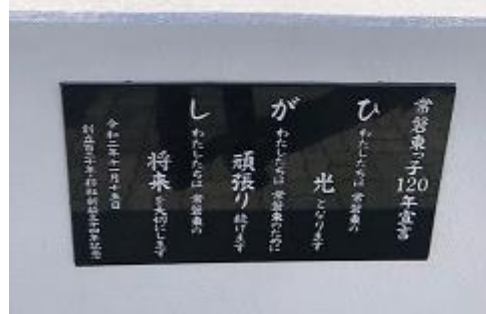
令和3年3月24日(水)その2
令和二年度岡崎市立常磐東小学校修了式

◇ 白木蓮 (ハクモクレン) に想う

正門を抜けた桜階段の「ソメイヨシノ」は開花を待つばかり。その向かい側にひっそりと佇む「白木蓮 (ハクモクレン)」は、一足先に蕾を開き始めた。

白木蓮は落葉樹。幹は白く、冬季は幹枝のみになるため枯れ木のように見えるが、花が添えられることで、その容姿を一変させる。

チューリップのように膨らみのある白花は存在感があり、枝に白い小鳥が留まり、佇んでいるようにも見える。



花言葉は「崇高」。
なるほど、ぴったりである。

品があり、そのうえ趣を感じさせるのは、向かい側の桜との共通点によるものだろうか。

枝に葉を備えてから花が咲くのではなく、葉をつけるよりも先に花が咲く。よって、見事に花が視界に飛び込んでくるのだ。

花開く前の蕾の時はどうかといえは、やはり、蕾の存在を邪魔しない葉がないため、日に日に膨らみ、開花に備える蕾の状態をはっきり確認することができる。

蕾の状態を確認できるからこそ、開花の趣を醸し出すのだろう。

冬の間ため込んだエネルギー（養分）を、開花に向けて一気に注ぐのが、桜階段をはさむ「白木蓮」と「ソメイヨシノ（桜）」。

開花に向けたその様子は、まさに「全集中」。

「花も咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」とは、よく言ったもので、人の目に見えない地中の根があってこそその開花に向けた「全集中」なのである。

冒頭で、「白木蓮」を「枯れ木」と喩えたが、目に見える部分は枯れたように見えても、目に見えない地中の根はしっかり、そして着実に成長していた証だ。

春と夏を経て、秋に至るまでの期間、白木蓮は、開花に葉の繁茂、結実と異なる形で成長を見せる。しかし、「全集中」に備える冬季の地道な生長こそ大事なのである。

登校時と下校時に児童が必ず通る桜階段。

校門からつながる桜階段に「白木蓮」と「ソメイヨシノ」が並ぶのは、結果が出ずとも地道に努力することの大切さを伝えるためにあるのだと考える。

今日は、令和2年度の修了式。

保護者をはじめ、地域の皆様のご支援により、無事に大きな節目を迎えられることができた。

喜びをかみしめるとともに、ご支援いただいた関係者各位に深く感謝申し上げたい。

開花の先陣を切り、卒業の門出に合わせた「ショウカワザクラ」に続き、春休みを挟んだ4月。桜階段の「ソメイヨシノ」と「白木蓮」が満開の中、
令和3年度が始まる。

